

ニュージーランドにおける

就学前教育の歴史ならびに現状（八）

松川由紀子

④ マオリと就学前教育

原住民マオリの子弟に対する教育は、伝統的なマオリの文化、生活様式を継承するとともに、欧州系の社会への同化を基本的路線としてすすめられてきている。⁽⁶³⁾現在、教育政策上、欧州系とマオリの間には原則的には何ら差別はみられない。しかし、マオリと教育をめぐる特徴的な状況は見い出される。ここでは、マオリと就学前教育をめぐる問題、特徴について若干記してみたいと思う。

① 概観

第二次世界大戦の後、マオリは職を求めて農村の共同体から都市部へ移住するようになった。⁽⁶⁴⁾マオリは一般に教育程度が低かったために、未熟練労働者になる者が圧倒的で、子弟の（低学年での）学力の遅滞も顕著なものであった。そのため、五〇年代後半以降、マオリ子弟の教育に対し、特別な関心が公的によせられるようになった。⁽⁶⁵⁾すでに小学校入学時に英語面の発達に遅れがみられ、学習動機も不十分なものであったので、就学前の教育を強化することによって発達を促進していこうという

議論がなされた。六〇年代前半には、就学前教育を推進し、受容していく土壌ができていた。⁽⁶⁵⁾ 六一年にマオリ子弟の教育向上を目ざしてマオリ教育基金が設置され、六三年にはそこに就学前教育官が任命され、その結果、プレイセンターを中心にして非常に急速にマオリ子弟の就学前教育機会が拡大されていった。しかし、既存の欧州系の就学前教育の場を利用できない者や、欧州系の価値に基づいてなされている就学前教育を拒否する者は、自分たちが最善だと思ふものを自分たちの手で子どもたちに与えたいとして、六〇年代中葉以降、独自のファミリープレイグループ運動を始めていった。⁽⁶⁶⁾

就学前教育拡充政策の結果、七〇年には、三、四歳児のマオリの約三十二パーセントが何らかの就学前教育を受けた。⁽⁶⁷⁾ この年、さまざまな地域でさまざまなタイプの就学前教育の場に関与している一〇三名のマオリの母親に、マクドナルド女史は就学前教育に関するインタビューをしたが、その研究報告によれば、血縁社会でなされているファミリープレイグループでは、マオリの歌やお祈りが導入されていて、マオリ語が英語とともに使用されているところもみられたという。⁽⁶⁸⁾ しかし、マオリのた

めになされる就学前教育のタイプについて、特に要望があるかどうか尋ねても、マオリ語を使用すべきだというような意見は何ら出されなかったという。むしろ、母親たちは、小学校への入学準備のために英語の使用を望んでいた。すでに、当時、マオリの全国的な語組織においてはマオリ語保持の希望が出されていたのだが、就学前教育を媒介にして保持を促進していくという意見は少なく、個々の就学前教育の場では、マオリ語を促進することに関心がある者がいれば、マオリ語は英語とともに使用されていた程度であった。⁽⁶⁹⁾ なお、ファミリープレイグループは、残念ながら一時的に増加しただけで、その後伸び悩んだ。⁽⁷⁰⁾ その理由としては、ごく普通の母親たちにとって、すべてを自分たちの手でやっていくことは重荷であったことがあげられる。特に、小学校への入学準備を与えたいという母親たちの強い希望を満たすような運営はむづかかった。だが、専門的な助言者のいる地域では継続できた。

一般に、就学前教育のプログラムは、自由遊び・自由選択活動のプログラムが定着している。このプログラムでマオリの幼児も英語を十分に学ぶことができるという

見解と、できないという見解がみられる。どちらが的を得た見解であるかは決着がつけられていない。しかし、現実には、マオリの幼児は小学校入学時に英語面の発達に遅れが一般的にみられていたし、また、小学校への入学準備をすることが就学前教育への期待として親たちに強くみられていた。そのため、マオリ居住区のキングダールテンに特別のスタッフを置いて英語の教育を強化していくことが試みられた⁽¹⁴⁾。また、七四年には、ワイカト大学マオリ研究センターの後援で、実験的：プレスカラーセンター（テコハンガセンター）が開設され、英語強化のプログラムが組まれ、三年間継続された⁽¹⁵⁾。

しかし、最近では、マオリ語・マオリ文化の保護の必要性が非常に高まり、英語とマオリ語を同時に使用する就学前教育機関、ならびにマオリ語のみを使用するところが増えている。とりわけ後者は、テコハンガレオセンターとして八二年四月より開始され、急速に広まりつつある。

以上が、マオリと就学前教育についての一般的な状況である。次に、マオリと就学前教育をめぐる問題、特徴として重要であると思われるテコハンガセンターの英語

強化プログラムとテコハンガレオセンターのマオリ語プログラムについてみていきたいと思う。

② テコハンガセンターの英語強化プログラム

実験的なテコハンガセンターは七四年二月に開設された⁽¹⁶⁾。テコハンガとは「巢」を意味するマオリ語である。ワイカト大学のマオリ研究センターは建物を提供し、運営の責任をもち、教育省は教師ならびに助力者の給与を支払い、設備を供給し、通園バスの維持費を受けもった。七四年に十五名、七五年に十名、七六年に十一名の四歳児が参加したが、その家庭の多くは母親が家庭外労働に従事し、経済的に貧困で、大家族であった。そのため、家庭教育（しつけ、絵本の読みかせ、社会見学など）はあまりなされていなかった。母親たちは就学前教育の重要性には気づいていたが、交通の便（自家用車）がなかったために、既存の機関に子どもたちを通わせることができなかった（そのため、テコハンガセンターでは通園バスの運行をとりわけ重視したのであった）。

テコハンガセンターは、小学校への入学準備を教育目的として定め、午前中のセッションのうち、その約三分の一を教授セッションにあて、残りを一般的な自由遊び

プログラムにあてた。教授セッションでは、英語強化プログラムとお話、音楽などがなされ、七五年からはマオリ語プログラム（簡単なあいさつや歌など）も若干採り入れられた。こうした教授セッション（とりわけ英語強化プログラム）は、この国の就学前教育の場ではきわめて例外的なもので、そのため、テコハンガセンターの実践は挑戦的な意味を十分にもっていた。英語教育の強化を重視し、そのために、小学校入学時までに必要な、基本的な英語を教えていく特別なプログラムを組んだ。子どもたちは、色や形、基本的な、日常的な言葉さえ知らない者が多かった（家庭では英語が使用されていたのだが、子どもたちの言語面の発達に対する働きかけが欧州系の家庭に比べて非常に少なかった）。子どもたちの英語はきわめて幼稚な段階であった。英語強化プログラムには、米国のヘッドスタートプログラムで使用されたピーボディ言語発達セットとディスター言語（その一）を用いた構造的英語教授プログラムの他に、さまざまな社会見学の機会を用意し、経験を広め、言語化、概念化していく経験プログラム、ならびに絵本に親しむ絵本プログラム（絵本を読みきかせたり、絵本を家庭にもち帰

ったり、教師が独自に工夫して絵本を英語強化のために使用したりすること）が採り入れられた。また、小学校入学時に必要な学習態度（教師の話をすわって聴く、指示に従う、課題をやりとげる、絵本や教材に親しむ、など）を身につけることも意図的に考慮されていた。そして、子どもたちは、どの位教育目的が達成されたのかどうか、定期的にテストされ、その結果によって各自に応じた教育プログラムが詳細にたてられた。

子どもたちは喜んでセンターに通った。休日を嫌ったほどだった。そして、結果的に言えば、子どもたちの多くは小学校入学時までに英語面の発達は順調に達成され、入学後の学習の進展も好調であった。とりわけ重要なことは、教師は七五年にあるグループの子どもたちにはピーボディやディスターのプログラムを与えないで、絵本による英語強化を試みたのだが、そのグループも他のメンバーと同様の十分な言語面の発達を示したことがある。つまり、教師が絵本を意図的に英語強化の目的のために独自に工夫して用いれば、十分に言語発達を促進することができること、言い換えれば、それはどの就学前教育の場でも可能であること（自由遊びプログラムの

なかでも可能であること)を示したのである。

以上が、テコハンガセンターでなされた実験的な実践の報告である。小学校入学時に英語面で遅れがあれば、こうした英語強化プログラムは小学校でなされなければならず、それだけ、スタートの時点で教師にも子どもにも負担がかかることになる。このテコハンガセンターでの試みには賛否両論があるようであるが、ともかく、就学前教育ならびに小学校低学年(ジュニアクラス)の教師たちにきわめて重要な問題を投げつけたことは否定できない。

③ テコハンガレオセンターのマオリ語プログラ

ム

テコハンガレオとは「言語(マオリ語)の巢」という意味で、そのセンターは八二年四月より開始された。マオリタンガ(マオリの文化、マオリの生活様式)を基調とするもので、現在、急速に広がりつつある。テコハンガレオの目的は、マオリの子弟の教育にとつて最善のマオリタンガの雰囲気(ワナウ(拡大家族)のセンターを設立し、マオリ文化の継承、とりわけマオリ語の保持を図ることである。そのため、そこで使用される言語はマ

オリ語のみである。マオリの婦人の間では、フルタイム労働が増加し、近年はそうした労働も受容的に考えられるようになったので、テコハンガレオセンターは、そうした家庭の子弟を対象にして、朝七時から夕方五時まで開かれ、いわゆる三歳未満児や放課後の学童の受け入れもなされている。多くの子どもたちは、家庭では英語、センターではマオリ語で過ごすので、幼少の頃からセンターに通っていれば、自然とマオリ語と英語の二国語を話すようになる(しかし、二国語をどちらも十分に身につけていくことは容易なことではないので、就学前のみならず就学後の言語教育のあり方が重要な問題となる)。センターは、家庭、マラエ(集会所)、教会などに開設され、保育センターとして必要な設備を整えていて、ひとりひとりの幼児の発達記録もつけられ、親との連絡も定期的になされている。保育料は各家庭から徴収されるが、その額は運営委員会が決める(家庭により異なる)。各センターは、この保育料とマオリ省からの補助金ならびに地域の援助で運営されている。指導者(保育者)の最低資格は、次の五項目である。

1 少なくとも十五歳までマオリ共同体で生活した、生

まれつきのマオリ語を話す人

2 子育ての経験のある人

3 三十五歳以上の人

4 全日保育労働を遂行できる人

5 地域のマオリ社会で信頼されている人

こうした指導者を中心に、地域の多くの人々の愛情に満ちたワナウの雰囲気の中で、子どもたちに最善の発達環境を用意することが重要視され、自然とマオリタンガを身につけることができるように意図されている。保育の方法も伝統的なマオリの子育てのしかたに基づく。つまり、マオリ語ならびにマオリのやり方に満ちた雰囲気（マオリにとってきわめて自然な雰囲気）のなかで育てていくことが、これらテコハンガレオセンターのマオリ語プログラムの特徴である。

八三年十一月現在、北島を中心に一八八カ所のセンターが開設されていて、五歳未満児は三〇〇名以上、指導者は二七二名、ボランティアは一八三四名が参加している。また、二五八名の学童も参加している。そして、各地域ごとにセンターの増設目標数を定めているので、さらに多くのマオリの子弟がこうしたセンターで幼少期

を過ごすようになるものと思われる。八三年八月にハミルトンにて開催された第三回幼児発達・保育大会においても、テコハンガレオについての特別プログラムが用意されていて、マオリの幼児教育問題は大会の重要な部分を占め、マオリ語と英語の二国語プログラムに関する研究もみられた。今後、テコハンガレオの子どもたちの小学校入学後の言語教育プログラムに関する研究がさらに進められていくものと思われる。

二国語教育問題は、この国ではすでに六〇年代から活発に論じられているのであるが、実際には英語が国語として教えられ、マオリ語は文化として絶やさない努力をされた程度であった（積極的な努力であったけれども、マオリ語は国語ではなかった）。マオリ語と英語をめぐる問題は、スウェーデンにおけるフィンランド語とスウェーデン語をめぐる問題に非常によく似ていると言われている⁽³⁾。スウェーデンでは、フィンランドからの移民の子弟の言語問題について研究されているが、ある注目されている研究によると、フィンランド語を十分に身につけた後にスウェーデン語を第二言語として教えるほうが効果的であること、言い換えれば、フィンランド語が不十

分な時にスウェーデン語を教えると、いずれも中途半端になること、が明らかになった。⁷⁰⁾このことはマオリにもあてはまる。マオリ語が不十分な時に英語を教えると、いずれも十分に身につかないことは、歴史的に証明される。このたびのテコハンガレオセンターの運動は、マオリの幼児が生活時間の大半をマオリ語で過ごして十分にマオリ語を身につけていくことを重視している。その後小学校での英語ならびにマオリ語の教育ということになるが、その具体的なやり方については試行段階のようである。このあたりをどのように実践していくのか、興味深く見守っていきたいと思う。それと、二国語プログラムを終えた子どもたちのその後の進路もまた重要な問題で、これにどのように対応していかなる政策を打ち出すのか、この点も見えていかなければならないだろう。

以上、マオリと就学前教育をめぐる問題、特徴について、実験的なテコハンガレオセンターの英語強化プログラムとテコハンガレオセンターのマオリ語プログラムを中心にして、若干みてきた。マオリは欧州系の社会に何ら差別を受けることなく生活している。しかし、同化が進むとともに、伝統的なマオリ文化、マオリ語の継承はむづ

かしい状況になっていく。マオリ文化を国民文化としてその保存に積極的に取り組もうという動きが、今日のテコハンガレオセンターの設置、増設であり、決して欧州系とマオリ系の民族対立ではないので、この点、誤解のないようにしていただきたい。言うまでもなく、ニュージーランドは平等社会で、福祉国家として着実に歩んでいる国なのである。

なお、参考までにニュージーランド国民の民族構成を記しておく、国民の約八十パーセントが欧州系、マオリは九パーセント、残り約四パーセントがポリネシア系その他となっている（八一年の統計による）。近年は、急速にマオリの都市居住化が進行し、混血も進んでいるので、厳密にはマオリであるかないかは判断しにくい。この国の統計では、興味深いことに、自らマオリであると届け出た者だけがマオリとして認定されている。

（山口女子大学）

註

(65) New Zealand National Commission for Unesco; Compulsory Education in New Zealand, Rev. ed., Paris, Unesco.

1969, pp. 64-66.

⑨ シンシントン著『児童観』二二二頁。

⑩ Ian A. McLaren: *Education in a small Democracy: New Zealand*, Routledge & Kegan Paul, London, 1974, p. 73.

⑪ Geraldine McDonald: 'Pre-school and Parent Education for Minorities', in *Association for the Study of Childhood, Equality of Opportunity Through Education*, Wellington, 1972, p. 59.

⑫ Barney: *op. cit.*, p. 8.

⑬ *Ibid.*, p. 338.

⑭ Geraldine McDonald: *Maori Mothers and Pre-school Education*, Wellington: New Zealand Council for Educational Research, 1973, pp. 151-166.

⑮ *Ibid.*, pp. 139-140.

⑯ Jane and James Ritchie: *Growing up in New Zealand*, George Allen and Unwin, Sydney, 1978, pp. 44-45.

⑰ Geraldine McDonald: 'Pre-School Education', in R. J. Bates (ed.), *Prospects in New Zealand Education*, Hodder and Stoughton, Auckland, 1970, p. 91.

⑱ Jane Ritchie, *op. cit.*

⑲ 以下の記述は、シモン・リッチ著の前掲書を参照した。なお、同様の英語強化プログラムが、オーンストラリアに於いても原住民マオリシムの就学前教育に使用された。

(G.R. Teasdale and A.J. Whitelaw: *The Early Childhood Education Aboriginal Australians*, Australian Council for Educational Research, 1981)。

① シンシントン著『児童観』二二二頁。著者、著書『シンシントン著』(Te Kohanga Reo', Department of Maori Affairs, May 1983) 'マオリ文化のシンシントン先生からの報告' (The Language Nest', *Tu Tangata*, June/July 1982, 45-50) 'The Language Nest', NZ Listener, July 24, 1982) 'シンシントン教育大学の特長' (J. Reid) より採った。第三回幼児発達・保育大会の冊子 (Convention Booklet, Third Early Childhood Care and Development Convention, Hamilton, August 1983) を参照して記述した。

② Penny Jamieson: 'All Our Children: The Language Education of Minority Group Children in Majority Settings', Paper presented at the Second Early Childhood Care and Development Convention, Christchurch, 1979. 45頁。資料はマオリシム教育研究誌『言語の文化』。

③ Tove Skutnabb-Kangas: 'Language in the Process of Cultural Assimilation and Structural Incorporation of Linguistic Minorities', in C-C Elert et al., *Dialectology and Sociolinguistics*, Acta Universitatis Umensis, Umea, Sweden, 1977.